達するまで止まぬ教である、此の向上の國民にいかにも適當なる教ではあるまいか。

あゝ花は盛りにして衰へる萌あり、國は泰平の春に亡國の兆が起る、此の怖るべき秋に際して十分戒心する所がなければならぬ、勤勉努力、以て日東理想國を大成して廣く人類の幸福を圖らねばならぬと、こゝに吾人の所思の一端を述べたのであります。

第十章　生活の大道

（事業に失敗せし人に送る書）

口度重なる事業の失敗と家内の不幸續とで、今は既う浮世の荒浪に闘ふ勇氣も無くなつたとの仰せ、まことに御同情にたへません。

口人間といふものは妙なもので、都合能く行く時には、何事も順風に帆を上げるやうに行くが、悪くなると、どこまでも悪い事が續くものです。しかしながら、人間といふものは生命のある間は、どこまでも遣れるだけ遣つて見ねばなりませぬ。辛抱の出來るだけ辛抱して奮闘しなくてはなりませぬ。元氣を落したら、モウそれで了です。

□あの獨逸のカイゼルのお父さんに當るウキルヘルム一世が、方々の國を相手にして、負けて負けて、負け續けた。モウ兵隊といへば纔はかりの近衛兵だけになつて了つた。

□さすが豪傑のウイルヘルム第一世も、愈〳〵弱つて了つた。大抵ならば、疾うに降參して了ふ所だが、さすがに彼は、最後の血の一滴までも鬪ふといふ强い〳〵決心を持つて居りました。

□それでも、敗報は頻りに臻つて、兵力から言へば、聯合軍の十分一にも足りなくなる。財政は元より窮迫の極に達する。何とも爲ようがない。それでも彼は屈しない。彼は味方の敗報を聞きながら靜

にステッキの先で砂上に何か圖面のやうなものを、書いてゐたが、殆んど絶望に瀕した彼の胸中に、忽然として萬死の中に、一生を得る一道が發見された。彼は忽ちに幕僚を集めて、其の一道の實行を企てた。

□爾來、東奔西走、彼方此方に轉戰して、遂に、さしも勝ち誇つた聯合軍に、遂〳〵先方から和を乞はしめたと申します。

□世渡りはお互に苦しいが、苦しいうちに愉快が求められる。人生生活の妙味は、苦境に在る者に尙更よく味はれます。どうです、ウイルヘルムを氣取つて、死中に活路を御見出しなさい。ナーニ、道は

八方にあります。

□死んだ守田寶丹翁に就て面白い話があります。翁が若い時に散々失敗して、裸一貫になつて了つて、どこかの二階へ食客に轉げ込んで、つく〳〵と悲觀をしてゐた所が、ふいとそこに貼つてある信州の俳人一茶の句が眼についた。その句は、

何不足人は裸で生れたに

といふのであつた。

□なる程と翁は手を拍つて感心した。元來裸で生れた身體だ。裸で死ぬ覺悟なら、失敗は敢て悲しむに足らぬと、飄然と悟つて、遂に事

業を回復したさうです。

□あなたも一つ裸になつて、赤裸々で身體を社會へ投出して、大におやんなさい。

第十一章　偉人と凡人

（青年會講演）

【佛教倫理の根本思想】

【一】　どんな人が最も偉いか

昔、眞言宗新義派の祖と言はれて居る覺鑁上人は、肥前の太宰少貳兼元の二男であつたが子供の時分に、自分のお父さんより偉い人は無いと思ふて居た所、國司が來た時に、お父さんよりも國司の方が偉いといふことが解つて大變驚いた。すると出家をして居る兄さんが、國司よりも、天子樣が偉く、天子樣でも三界の至上尊たる佛樣に歸

依を遊ばすといふ事を聞いて大變感動して、それでは私も佛にならうと、出家されたといふ事は有名な話となつて居りますが、私は嘗て斯ういふ事を考へた、昔から、偉人の定義に就て、いろ〳〵な議論がある。何ういふ人が偉い人であるかといふ事は、人それ〴〵の見方があつて、一つの語で言ひ現はす事は出來ぬのであらうが、私は斯ういふ風に言へるであらうと思ふ。即ち「最も大なる偉人とは最も多くの物を支配し得る人である」。と、これが私の偉人の定義であります。

例へば、村長は其の職權の範圍内で村民を支配する、村の長である

から一部落の總代さんや、區長さんより偉い。しかし、郡長は同樣の意味で一郡全體の人を支配するから村長さんの上に居る。其の郡長よりも知事さんが一層多くの人を支配し知事さんよりも大臣、各大臣よりも總理大臣といふ順序に偉いとせられて居る。大工場の主人は小さい工場の主よりも多くの職工を使ふといふのであるから偉いと言はねばならぬ。豐臣秀吉が偉いといはれるのは、彼が匹夫より起つて能く戰國時代の群雄を征服し、日本六十餘州を掌の中に支配したからである。ナポレオンが偉いのも同樣に一時は歐洲全土を支配し得たからである。今度の歐洲の大戰爭は、カイゼル

が聯合各國を支配するか、聯合各國がカイゼルを支配するか、どちらが偉いかの試驗である。支那の清朝の天子樣は幾億の蒼生を治下に持ちながら、充分に支配する事が出來ないから滅びて了つた。恐れ多いが我が日本の天皇陛下は、僅かに六千萬の臣民の上に在らせられるが、一たび起ち給へば、東亞の天地は御自由に支配せられるが故に、世界の人々が偉大であると尊敬するのであります。

斯ういふ風に見てまゐりますと、お釋迦樣をはじめ、基督や孔子などの偉大なる所以が解るでありませう。卽ち是等の聖人は、其の富の力に於ては、お釋迦樣は一介黃衣の沙門であつた。基督はナザレ

の大工の子であつた。孔子とても一生を不遇に送つた人であつた彼等は權力に於て、武力に於て、或は匹夫にも劣る人達であつたけれども、其の精神は幾千年の後までも世の光明となり、活力となり、生命となつて、世界中の人心を支配してゐる。どんな金持でも、どんな豪傑でも、學者でも、大臣でも、或は帝王でも、此の一介黄衣の沙門、馬槽の中に生れて、大工の子、或は轗軻不遇の夫子等の德敎を外にしては、世に處し、世を治めてゆくことは出來ませぬ。假りに日本の思想界から、孔子の敎や佛敎を取つて了つたらどうでありませう。日本の寺を壞して了ひ、經文を燒いて了ひ、僧侶を還俗さして了ふばかりでな

く、儒敎の精神、佛敎の精神を殘らず、取つて了つたら、日本の德敎はどんなものでありませう。忠孝の道は廢れ、慈悲博愛の精神は亡び、人心の糧となるべき信仰は無くなつて、我々は曠野に肉を爭ふ虎狼の群に在るやうになつて了はねばならぬ。人は、今日の日本には、佛敎や儒敎の精神は衰へて居るといふ。成程衰へて居る事は事實であらうが、衰へたなりにも日本の德敎を支配して居るものは佛敎と儒敎であつて、是を取つて了へば身を修め國を治むる道は何物もない日本の思想界は實にお釋迦樣や孔子樣などの支配される所であつて同樣に基督は泰西諸國の思想人心の多くを支配して居る。これ

が實に是等の人達が聖人と呼ばれ、偉人と稱せらるゝ所以であつてマホメットにしろ、ソクラチースにしろ、すべて「人心を多く支配する」といふ點に於て偉いといふ事が出來るのであると思ふのである。

偉人や、聖人の反對は凡夫である。基督教では罪の子とか、迷へる羊などゝ言ひ、佛教では凡夫といふ。所謂底下の凡夫といふは、我々のやうな人物を指すのであるが、何故に罪の子といひ、迷へる羊に譬られ、底下の凡夫と卑しめられるかといへば、聖者偉人と反對に、外物を支配せずして、外物に支配せられるからである我々は名譽の奴隷

となつて名譽に支配せられる。金錢の奴隷となつて金錢に支配せられる。戀の奴隷となつて戀に支配せられる。世間の何でも無い塵勞に神經を惱まして、其の何でも無い事に支配されて居る。田を持つて居れば、田に支配され、家を建つれば家に支配される。何でも角でも外物に支配されて、それが爲に身を苦しめ、心を苦しめて常に不安な生活をして居る。聖者、偉人とちやうど反對である。

誰でも、偉い者になりたい、こんな不安な生活を續けたくないと思ふのであるが、事實は、誰でも餘り偉く無く日々夜々に不安の生活を續けて居る。人間は外物を支配する偉い者になりたいと思ふて種

々な欲望を起す。金を澤山儲けたら、世の中の事が自由になるであらうと思ふて、金儲に執心するが、結局其の金儲といふ事に執着して了つて、金に支配される。此の戀さへ遂げられたら、自分の一生は何の位幸福な事であらうと、命までも投出して思ひ詰めた戀がよしや成就してみても「あひ見ての後の心に比ぶればむかしは物を思はざりけり」で却つて苦しい思ひを增す。すべての事に執着する、此の「執着」といふことがあるのが凡夫の凡夫たる所以であつて、外物に支配されるといふことは、外物に執着するといふ事である。此の執着心に走使されるから、我々は常に凡夫であつて、不安な生活をせねばならぬのである。そこで此の執着心から離れる、執着から解脫した生活をするといふことが、佛教信徒が生活の理想である。

【三】 倫理的唯心論

一體倫理とか、道德とかいふものは、人が此の世に生存し、向上發達して、人として最高の位置に達する爲に見出した道である。人が苟くも向上發達して、人として完全な生活を營みたい、人として最高の位置に達したいといふ以上は、我々の行爲に對して、吾々が理想に達するには如何に爲すべきであるか。又、此の行爲は、人として行ふて果して正しいものであるか何うかを判斷して取捨撰擇せねばなら

ぬ。此の人間行爲の善惡正邪を判斷するのが倫理道德の役目である。さうして、倫理道德は人が最上の理想に達するために、行ふて價値ある行爲を善といひ、人の理想に達する妨ぐる行爲を惡と言ふのである。倫理の最上理想は至善である。至善とは、人が人として最も完全に生活し得らるゝ狀態を言ふたものに外ならぬ。

然るに我々は前にいふ通り自身が向上發達するために、卽ち偉い者になりたいために種々と欲望を起すが、結局其の欲望に執着してとても倫理でいふやうな理想に達する事が出來ない。そこで其の執着心を離れて修行をして佛に成れ、成佛をせよ、そうすれば自ら完

全な人としての生活が出來るのであるといふのが所謂佛敎倫理の根本思想である。

そこで、其の執着を離れるには何うすればよいか。これが卽ち佛道の修行である。敎主釋尊が六年苦行は、此の執着心離脫の修行であつたのである。

そのむかし、釋尊は畢波羅樹下に在りて思惟せられるやう「凡そ一切衆生が迷ひ苦しむといふのは、執着心があるからである。此の執着心は、これを覺らぬ愚痴無明から起る。此の愚痴無明を打破して了へば、卽ち佛となる事が出來る」。と、斯く悟得して遂に佛となら

れた。さて其の愚痴無明を打破する道は何か。起信論には斯う說いて居る。

三界は虛僞にして唯心の所作なり。心を離れて則ち六塵の境界無し。乃至心生ずれば則ち種々の法生じ、心滅すれば則ち種々の法滅す。

三界とは、我々の執着の生活である。外物に支配せられて居る生活である。金錢に支配され、名譽に支配され、戀に執着して居る生活は虛僞の生活であつて、此の執着心の作る所、故に此の執着心が消えて了へば、我々の東奔西走する迷の生活は消えて了ふ。迷の生活が消

えて了へば、こゝに始めて眞實の生活が顯れる。虛僞の生活をする者は虛僞の人で、凡夫である。眞實の生活をする者は眞人である。佛陀である。眞人は外界を支配する偉人である。聖者である。虛僞の生活を營む我等は、外物に支配され、走使されて不安な生活を續けて居る罪の子である。迷へる羊である。底下の凡夫である。

【三】 三界唯一心、心外無別法

むかし、華嚴宗に元曉といふ大學者があつた。此の人は、元新羅の人で、遙々と入唐して道を求めた人であるが、或る時、道を諸方の善知識に訪はんとして、獨り荒野に行き暮れた。詮方なく、其儘叢の中へ

入つて星を仰ひで横になつたが、喉が渇いて仕方がない。其邊を探つて見ると、一の穴の中に清水らしいものが溜つてゐるやうであるから、取りあへず手に掬して飲んで見ると、まことに旨しい。渇を忘れて心持よく睡に就いたが、夜が明けて其の穴を見るといふと、清泉と思の外髑髏の中に溜つてゐた雨水であつたので、忽ち嘔吐を催ふして來たが、飜然として悟つて曰く「心生すれば則ち種々の法生じ心滅すれば髑髏不二、佛が三界は唯心の造る所であると言はれたは眞實であつた」。とはじめて華嚴の深旨を實地に證得せられたといふ逸話がある。

まことに其通りで、清泉と思ふて飲めば、髑髏の水も清泉と違ひはない。憂き世の苦勞も心の持方一つで苦も樂の種となり、歡樂變じて哀傷となる。苦樂昇沈は唯心一つの持方である。仍て、我々の生活は、苦も樂も美も醜も、心の造る所で、苦樂美醜は外界に在るのでないから、苦しいとて、苦に執着して苦痛のために自身を支配せられることなく、樂しいとて、樂に着して、眞の生活を忘れるなよと敎へたものが佛敎の倫理的唯心論、これが佛敎敎理の根本である、所謂佛敎倫理の根本思想である。

【四】 迷悟

執着の起るのは、我等の欲望に左右せられるからである。すべての欲望は自己を中心として居る。そこでこの自己なるものゝ無價値を覺らせて、執着の欲望となる自己の中心の執着を打破せんと敎へる。迷の生活が虛僞の生活であるとすれば、虛僞の生活を營む我等も虛僞の人である。此の虛僞の自己の無價値なるを覺つて、眞の自己を見得せよといふのが、所謂無我の敎である。無我の境界とは即ち執着心を離れた境界で、我等が名譽のために名譽を求むるの非を覺り、利欲の奴隷となる事の愚を覺り、純潔なる愛情に生活し、すべて生甲斐のある生活を營むことの出來る、これが取も直さず佛の境

界であり、極樂の生活であり、完全なる人生の生活であつて、倫理の理想に達したのである。

執着を離れた生活とは、どんな生活であるか、「法華經」の壽量品にかういふ風に說いてある。

如來は如實に三界の相を知見し給へり。生死の若くは退若くは出有ること無く、亦た在世及び滅度の者無し。如にもあらず異にもあらず、三界の如くに三界を見たまはず。

如來とは、とりもなほさず此の執着心、迷情を去つて、眞の生活をした者を指す。三界とは我々の生活して居る此世界である。如實と

は迷情を去つて、眞の生活をして居る者の眼に映じた世界其まゝの相である。世の虚偽の生活から去つて、眞の生活をして居るものには、此の世界の世態人情が、ありのまゝに映る。生活の苦も無ければ死の哀傷もなく、實とか虚とか、眞如とか遷流隔異とかいふやうな面倒な議論はない。三界の如くに三界を見ず、迷の眼を以て迷の世界を見ず、虚偽の世界を離れて眞實の世界に生活するといふのである。

おもしろや野邊の草木の末までも
我を捨つれば我身なりけり

此の名譽や利欲や、戀に執着し、支配された我欲の我を捨てゝ了へば

不思議や、天地は我物となつて、幾百萬の血を流し文明の敵と呪はれるカイゼルの愚を學ばぬまでも、波荒きセントヘレナの孤島に空しく孤影を横たふ彼のナポレオンが悲慘な末路を見ないでも、藁の伏家の中に居て大偉人たる事が出來る我等は妻子と共に一椀の粥を啜りながらも天地を支配する大偉人たる事が出來るのである。

第十二章　生活問題と宗教

【一】

「南無阿彌陀佛は能く生活問題を解釋し得るか」とは、嘗て東京の一新聞記者が生活問題を論ずるに當つて發した嘆聲であります。その新聞に、地方の一讀者が、地方人士の窮乏を訴へた寄書を掲げてゐました。その一節にいはく、

小學教師、秩序整理の爲め、同生徒に行厨携帶を命ず。一生、命に從はず、之を詰れば、一生、實を以て答へて曰く「お粥は持つて來

られません」鬼の如き教師、亦眼に涙ありき。

『全村農を以て立つも、八割は小作人にして地主と自田作りを合して二割に過ぎず、小作は一段を作り豐年にして利益五斗に過ぎず而も薄利なる田地すら小作の人多きに堪へざらんとす、一家三人三段を作りて一石五斗他に副益ありとするも、課稅の重き今日、爭でか一年を過すを得んや、是に於て乎、熱しては惡木の蔭に憩はざるを得ず、彼等は官林に盜伐す、始めは山目付の官吏を怖るゝも、終りには隊を成して之に入る、捕縛せらるれば、喰ふに心配なしとて喜色あるものあるに至る、法律、道德、宗教何の權

威ぞ。（中略）

『諸君よ、陛下の赤子は斯くて日に困窮と孤獨に赴きつゝあり、諸君は神祠佛寺に詣でよといふ。吾人は詣づる前に一日の糧を用意するか、然らずんば一日の食を缺ざるべからず。（明治四五、三、二三、萬朝報）

さて諸君は此の新聞の記事に依つて目下我國中流以下の生活狀態が如何に悲慘を極めて居るかといふ其の一端を知り、同時に「宗教は生活問題を解く與はず」「我等は道を聞く前に先づ食ふために働かざるべからず」といふ現代人士の僞らざる告白を明かに聞かれた事であらう。否、知るとか聞くとかいふよりも、寧ろ是等の事實

は諸君が現に痛切に味はふて居られる事であらうと思ふ。實に斯ういふ現象が社會の上に起つて居るといふ事は寔に宗教の危機である。否、宗教は之が爲めに人々から忘れられても宜い、之れが爲めに宗教の無い社會、信仰の無い社會が現れた時は其の社會が何うなるであらう、其の人生が何うなるであらうかと思ふと實に寒心に堪えぬ。我等は宗教家である。併しながら宗教あるが爲めに宗教を信ぜよと諸君に說く者でない。宗教を信ずれば此の生活問題の苦痛をも脫却し得ると信ずるが故に諸君に宗教を說くのである。「宗教は能く生活問題を解く」「我等は食ふ爲めに働くと共に道を聞か

ざるべからず」と信ずるが故に諸君に道を說くのである。然るに社會の事實の寫し繪である新聞紙が、こんな事實を語つて居るといふに當つては、われは社會の爲め人生の爲め、一言道の爲めに辯じなければならぬ。

と申すのは、何といつても人間に生活問題ほど大切なものはないわれ〳〵が生れてから死ぬるまでの努力といふものは、畢竟生んがための努力であつて、生活を度外視しては、われ〳〵は生ることが出來ないのは勿論である。「ひもじさと寒さと戀と比ぶればはづかしながらひもじさがさき」戀であらうが、名譽であらうが、ひもじさに

勝つものはない。「神を拜する前に食を求むる爲に働かざるべからず」といふのは、僞の無い所であつて、まづ何よりもわれ〳〵は食を求めなければならぬのは勿論であるが、人は往々にして其食を求むる事急なるがために、野獸に等しい行ひをなし、生活問題に執着する結果、肉に生ても、靈に生ないといふ悲しむべき狀態に陷るものである。人の生活には身心の二面がある。われ〳〵は身體をひもじくないやうにすると共に、心をひもじくないやうにせねばならぬ。耶蘇基督が言つたやうに、人はパンのみによつて生るものではないのであります。然るに、肉の欲求は、靈の欲求よりも强烈であつて、人

が墮落すればするほど、精神上の問題を忘れて、現實の生活問題に齷齪するやうになるものである。それで、人間の向上發達を害するには、生活問題ほど怖ろしい惡魔はないのである。「四百四病の病より貧ほど辛いものはない」げに貧は諸道の妨げである。

【三】

古來の聖賢は、よくこの貧苦と鬪ひ、生活の苦しみに打克つて道を得られた。諸君は我が佛敎の敎主釋尊が、菩提樹下に修行をして居られた時に、此の修行を妨げる爲めに種々の惡魔が現れたといふ物語を御存じでありませう。其の惡魔とは、經文に記す所を見まする

と、貪欲軍・不歡喜軍・飢渴軍などゝありまして、その飢渴軍こそ我々が道に進むに當つて、之れを妨げる生活問題であります。如何なる聖者も生活難には心を苦しめる。昨日まで王者の生活をした悉達太子には、一麻一米の苦行が如何に苦しいことであつたでありませう坐禪の石上に眼を閉ぢて瞑想に入らうとすれば、飢と渴へは迫つて來る。これを忘れやうとすれば、なさけなや眼前に歷々と浮かび出迦毘羅城中の珍膳佳肴、眼を開けば忽然と消えて跡形もない。斯ういふ幻影にしば〳〵苦しまれた事が本行集經などに出て居る。これはつまり人間が理想に達しやうとするに當つて、現實生活の誘惑

と苦痛とを嘗たものであると見る事が出來る。また孔子さまは、初めは魯の三公の一なる太子空の職に在つて政を執られたが、五十六歳で流浪の身となつて、老軀を提げて四方を浪々さるゝ事十三年時非にして其道容れられず、窮迫の老生涯を送られた。耶蘇基督の如きも、猶太のベテレヘムに大工の子と生れ、自身も大工を業として貧しい生活をされたやうである。然るに此の人達の行動と、その說かれた福音はどうであつたでせう。釋尊は尼連禪河の邊、苦行林に於て、一麻一米の苦行を續け、纔に善生女の捧ぐる一杯の牛乳に氣力を恢復して、畢波羅樹下の成道をされた。釋尊が說かれた生活の道

は知足の法でありました。

汝等比丘、諸の飲食を受けては、當に藥を服するが如くすべし好きに於ても、惡きに於ても、增減を生ずること勿れ。趣に身を支ふることを得て、以て飢渴を除け。蜂の花を採るに、但其の味はひのみを採つて、色香を損せざるが如し。（遺敎經）

知足の法は卽ち是れ富樂安穩の處なり。知足の人は地上に臥すと雖も猶ほ安樂なりとす。足ることを知らざる者は天堂に處ると雖も亦意に稱はず。知足の人は貧しと雖而も富めり（同）

これが釋尊の說かれた少欲の法である。蜂は花を食物としても、そ

の蜜ばかりを取つて、花瓣は食はぬ。人の生活は、衣は寒暑を凌ぐに足り、食は身命を支ふるに事足る筈で、その外に美衣を好み、美食を求むるは、つまり贅澤である。蜂が蜜を取つて、花瓣を食はぬやうに、人も亦必要なる衣食に安んじ、贅澤をする勿とのお言葉はまことに有難い御教訓ではありませぬか。

一體、生活難、生活難と喧しく申しますものゝ、其實は生活難でなくて、贅澤難でありませう。昔、ダイオゼチスといふ哲學者は、人は何でも簡短な暮をせねばならぬ。それにつけては、食卓に就いて、入らぬ器をならべるのは無用の事だといふので、お椀で御飯を貰つて食べ

てゐたが、しまひにはそれも面倒だといふので、犬はお椀も持たず、家も無いから、自分も犬のやうに暮さうといふので、桶の中で起臥をし掌に御飯を受けて食べたといふが、命を繋ぐにはそれでも澤山である。文明人の特色として、自分で面倒な暮しをせねばならぬやうな身體を拵へて、暮しにくい〳〵といふて居る。人は宜しく釋尊の教のやうに、蜂的の生活をすべきであつて、身命を支ふるに足る意外の衣食は無用の贅物だと極めて居れば生活難の叫びは無いであらうと思ふ。又、人間生活の苦樂は決して外界にあるのでなく、心の富めるものは、地上に臥ても天堂に在るが如く、心の貧しいものは、よし

や天堂にゐても地上に在ると同じである。釋尊は、人生生活の快樂を上中下の三等に分ち、財産の豐なる快樂の如きは、其の最下等なるものとせられた、

負債なく及び慳せず、斯れを名づけて下樂と爲す。財有りて布施を行ふ、此を名づけて中樂と爲す。身口意淨く、智慧ありて多聞を樂む、此れを則ち上樂と爲す、慧者の行ふ所なり。汝等今日より乃至盡形壽まで、長幼互に相敎へて、此の中上の法を行へ

（大般涅槃經）

身外の財産は兎もあれ角もあれ、心の富を求むるのが、われ〳〵佛敎

徒の勸むべき事である。

【三】

聖人の敎は東西同一轍であつて、われらの踐むべき道を示して居られる。耶蘇基督が曠野を小迷ふて居る時に惡魔が出て「神の子は石を變じて麭麵とせよ」と試みた時に、耶蘇は斷然として言ひ放つた。「人は麵麭のみに依つて生きるものでない」。惡魔は遂に逃げ去つた。基督は我等に敎へていふ、

神の國は飲食にあらず。惟義と和と精靈に由る歡樂に在り。

とは羅馬書に在る教訓である。またおなじき書に、

肉の事を念ふは死なり。霊の事を念ふは生なり。安きなり。

と教へて、我等は肉を超越して、霊に生きよと教へて居る。耶蘇はまた不義にして、榮華に傲れる者を嫌ひ、物質的快樂より、精神的快樂に生きん事を口を極めて説き示し、生活問題に思ひ煩ふ者の愚を戒め貧者の恩寵を説いて、貧しき者こそ却て福なれと説いた。

人は二人の主に事ふること能はず。……汝等神と財とに兼れ事ふること能はず。……是故に我れ汝等に告げん、生命の爲に何を食ひ、何を飲み、また身體の爲に何を衣んと憂ひわづらふこと勿れ。……汝等天空の鳥を見よ、稼くことなく、かることなく、倉に蓄ふることなし、然るに汝等の天の父は之を養ひ給へり。汝等之よりも大に勝るものならずや。汝等のうち、誰か能く思ひ煩ひて其の生命を寸陰も延べ得んや。また何故に衣のことを思ひわづらふや。野の百合は如何にして長つかを思へ、勞ず紡がざるなり。我汝等に告げん、ソロモンの榮華の極の時だにも、その裝この花の一にも及ざりき。神は今日野にありて明日爐に投入れらるゝ草をも、かく裝はせ給へば、まして汝等をや嗚呼、信仰うすき者よ。然れば、何を食ひ、何を飲み、何を衣んと思ひ煩ふ勿れ。是れ皆異邦人の求むるものなり。汝等の天の父は、凡て是等のものゝ必需を知り給へり。汝等先づ神の國と其義とを求めよ。然らば是等のものは、皆汝等に加へらるべし。（路太傳七の二四―三三）

これは有名なる耶蘇の教訓である。

孔子は我等に教へていふ、

疏食を飯ひ水を飲み、肱を曲げて之を枕とす、樂亦其中に在り

不義にして富み且つ貴きは、我に於て浮かべる雲の如し。

と、不義の榮華を退けて、清貧の樂を說かれた其の四方に漂浪して、吾道を行ふことを得ず、老脚蹉跎として再び魯に歸られた時「嗚呼、吾が道遂に窮す。世遂に吾れを知るもの無きか」と歎かれた時門弟子貢が之を聞いて慰めていふ「何ぞ夫子を知るものなからんや」知つて居るものはございまするといふと、孔子はこれに答へて「天を怨みず、人を尤めず、下學して上達す。吾れを知るものは夫れ天か。君子は歿して名の稱せられざるを病む。吾が道行はれずむば、吾れ何を以てか後世に見えむや」と其の道の行はれざるを痛むで、その

身の不遇なるが如きは度外視されたのである。

われ等宗教によりて生活の向上圓滿を圖らうとする者は、正しく是等聖人の教に從ふべきである。我等は何を着、何を食はんと思ひ煩ふに及ばぬ。我等が佛の教に依りて生活し、佛の教によつて世の營を爲す間に、其等の者は自ら得られるのである。「世事を營むひまに念佛申すと思ふべからず、念佛のうちに世事を營むべし」。（法然上人）との教訓は、われ等の忘れてならぬ所である。

【四】

「南無阿彌陀佛は能く生活問題を解釋し得るか」と叫ぶ者に諭へ

る。成程一切經を何處を繰つても一升貳拾七錢の米を拾五錢に値下せよとは說いて無い。聖書の何處を開いても、物價騰貴の原因は一句も見當らないでありませう。しかしながら、宗敎は、人生々活の根本問題に入つて如何にせば人は圓滿に生活することが出來るかの大道を示すものである貧乏であらうが、金持であらうが順境であらうが逆境であらうが、そんな事には頓着はない。貧乏は貧乏ながらに、金持は金持ながらに、われ〳〵を圓滿に幸福にするのが宗敎の力である。

われ〳〵は佛の敎を信ずるものであります。佛の敎は我等に勤

勉を敎へ、努力の活力を與へ、一家の和樂圓滿を與ふる敎である。世の生活問題に苦しむ者に、私は耶蘇の言葉を假りて敎へやうと思ふ「何を食ひ何を飲み、何を衣んと思ひ煩ふ勿れ。汝等先づ佛の敎に入れ、然らば是等のものは皆汝等に加へらるべし」と。

第十三章　佛教大意一夕話（原始佛教の教理一班）

佛教の精髄

佛教の精髄はと問はゞ、昔は鳥窠禪師は、白樂天に諸惡莫作の偈を以て答へられた。（但此の偈は、增一阿含經其他に出て居るので、鳥窠（ウサウなどゝ讀んではいけない）禪師の自作でない）此の偈に限らず、或は六字の名號であるといふことも出來る。七字の題目であるといふことも出來る。坐禪見性とも、一心三觀ともいふてよい。別け登る麓の道の數々から月の眺め方の種々によつて、さまゝゝの名を附けたまでゝある。

小乘から大乘へ

昔から、佛教に大乘と小乘とがあるといふ。乘とは、乘物のことで生死の此岸から解脫の彼岸に達する乘物、卽ち教法に大小がある。阿含などの教義は淺くて小さい、華嚴、方等、般若、法華涅槃などの教理は深くして大である。故に前者を小乘といひ、後者を大乘といふと說明する。しかし、これは所謂大乘に屬する教義を奉じる者が、勝手に附けたものである。

西洋の或學者が「神は國民と共に進む」と言つた。大乘小乘の區別は、同じ一つの佛教が、人間の思想と共に發達したものである。八

宗九宗と別れたのは、發達する道筋に擴がつたのである。大小乘の教理の比較や詳しい歴史の話はこゝにする必要はない。今旦く、釋尊が發心の初めに説かれた所謂阿含經中に湛へられた醍醐の一滴を味はふて、低きより高きに登るしをりともしよう。

三法印

諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜。これを佛教の三法印といふ。印とはしるしの義でありまして、この三つのものを以て佛教が他の宗教と異なるしるしとするものである。世の相は如何に、われらは如何なるものか。われらが達すべき最後の理想は如何にと、卽ち佛教の

世界觀、人生觀はこの三句に盡きてゐるのである。

諸行無常

「祇園精舍の鐘の音は、諸行無常と響くなり」と古くより人口に膾炙して、花に泣き、月に感じ、人生を歎かしめたる此の思想は、佛の常に説かれた所であつた。「增一阿含經」に、彼の釋迦族滅亡の時に當りて、佛は遙に東の方、城門の內に火の揚がるのを見て、喟然として世の無常を嘆じ、偈を説いてのたまはく、

一切行無常　生者必有死　不生必不死　此滅最爲樂

と「長阿含經」にある。又因緣經（涅槃經にも出づ）に曰く

諸行無常　是生滅法　生滅滅已　寂滅爲樂

と、三千の房舍、五百の樓閣が天に聳ゆる祇園精舍の夕の鐘と俱に佛の說法は、先づ此の世は、流轉極まり無き無常の境となし、其處に住するわれ〳〵は、悲嘆・懊惱・苦痛のものと觀せよと敎へて、ゆく川の流れに、一度逝きては、復と還らぬ悲しさを示し、山より下る水によせて、人の命の果敢なく消えゆくことを喩へ、以て速かに、此の無常苦痛の世界、無爲の涅槃界に達せんことを、口を極め、心を盡してお說きになつた。

まことに世界は無常である。人生は苦痛である。然るに此の恃むべからざる人生を恃み、果敢ない世相に執着して、色よ、香よ、欲よ、榮華よと、あこがるゝは何故ぞ、これ人々が「我」といふ五尺の身體に執するからである。人の五尺の身體は、たとへば、水を盛たる瓶の如し瓶を取つて其れを檢せよ、碎けては土となり、水は四散し盡して、何れの所に瓶の本體があらう。一切の物に本體なしと觀ずることを諸法無我といふ。無我なれば、執する所なく、着する所なく、生を愛せず死を厭はず、無爲湛然たる、これを「涅槃寂靜」といふ。

涅槃の境界は、人生究竟の理想境である。色もなく、香もなく、肉體は白き死灰の如くに滅し、知なく、識なく、無爲湛然たる境界、これを無餘涅槃といふのであるが、釋尊が我等のために說かれたのは、有餘涅槃、卽ち我等の心を淸淨にして、惡心邪念を起さぬやうになるをいふ。卽ちわれらの日常生活そのまゝに涅槃の境に入る、之れを大乘の涅槃といふ。大乘といひ、小乘といふは、此の涅槃、卽ちサトリの高低によつて名付けたものであるが、釋尊が阿含に說かれた敎理は、是の如く、無常を觀じ、我を滅して、無爲湛然の涅槃界に入るを以て、久遠不易のしたのであつた。

さて、原始佛敎の敎理は、斯ういふ風に、厭世的、出世間的のものである。こゝに於て、斯ういふ敎理を信ずれば、其の結果として、われ〳〵は世を厭ひ、生活を厭はねばならぬのであるが、事實は左樣でなかつた。

無常なるが故に人々は、奮鬪努力して常住を求めた。卽ち佛が、此の世は無常なりと說かれたのは、無常なるが故に、常住を求めよとの敎誡であつた。無我の敎は、此の肉體の執着を脫せよとの敎である肉體を離れて、そこに何物がある。夫婦の愛も、生活の趣味も、此の五

尺の身體あつての上である。若し、無我の教を信ずれば其の結果、我々は自殺せぬまでも、無氣力、無情の者となつて、血あり情ある人間としての生活は出來まいといふことになる。而も事實は是れに反してゐる。人々は無我なるが故に利己的でなく、他を愛した。生活の妙味は他を愛することによつて生じる。子を愛すればこそ親は働き、妻を愛すればこそ夫は働く。これを擴充したのが慈悲である。慈悲は無我の修養によつて得られるのである。涅槃の教理は、死灰の如しと言はれた。而も、闇が消ゆれば、光明が輝く、煩惱が消ゆる時涅槃の光明は輝いて、我等に大活力を與へる、その實例は、成道以後五

十年間、大活動、大奮鬪をせられた釋尊の言行が生ける證據である。

正面より見たる諸行無常、諸法無我、涅槃寂靜の教理は明かに厭世教である。而もそれを信じた我等は、人生の强者、世界の勇者となるまことに妙である。然り妙である。こゝが佛教の妙處である。

後の世を思ひつゞくる涙には
こゝろの月のくもらざりけり

四　諦

三法印を以て世界人生の實體を說明せられた佛は、更に、何故に斯く世相は無常なるか、人生は苦なるかと其の緣て起る所を究められ

た。これを示されたものを四諦といふ、四諦とは、苦・集・滅・道の四の諦かな道理である。

苦諦

畢竟するに此の世界人生は苦しみ多く痛み多き世の中でなければならぬ。啻に人間ばかりでなく、三界六道は苦痛に燒かるゝ火宅である。指を屈なへば、人は生れて生活の苦あり、老て衰へる老苦あり、病苦あり、死苦あり、これは生老病死の四苦といふ、更に算ふれば逢へば離る、別離の苦、惡む者に會はねばならぬ怨憎會苦あり、求めて得ざる求不得苦、更に色、受等の五陰より來る五陰盛苦あり、所謂四苦八

苦の劇しき、まことに堪へ切れぬではないか。

集諦

何故に人世は斯樣に苦しまねばならぬか、卽ち此の苦の起る原因はいかに。これを說明する道理を集諦といふ。集諦とは、此の苦が過去に於て行ふたる業因（業はシワザ、因はタヲ、卽ちわれらが心に念ひ、口に語り、身に行ふこの業が因となる）から來る、此の業因は何故に起る、卽ち後に苦を生じる因となるやうな所作をするといふのは、畢竟はわれらが眞理に暗い迷妄から起る、これを迷といひ、無明といひ惑といふ、此の惑が業を生じ、業によりて苦を受け、車の輪の如く

惑、業、苦の三が輾轉し、循環して、過去・現在・未來の三時に續いて止まぬを生死輪廻といふ、斯樣に惑と業は苦を集める原因であるからこれを集といふ。

滅諦

此の苦の原因の集、卽ち無明を斷つて苦を斷じ盡した所を滅といふ、この滅の境界が彼の涅槃である。然らば其の無明を斷つて涅槃卽ちサトリに到る方法は如何。これを

道諦

といふ。道とは涅槃に達する道である。其の道は如何なる道か

鹿野苑の說法に於て、佛は此の道は八正道であると說かれたのである。

八正道

三法印・四諦の敎理は理論である。八正道は實行である。

一、正見　二、正思惟　三、正語　四、正業
五、正命　六、正精進　七、正念　八、正定

正見とは、此の四諦の道理に戻らぬやうに、正しく見解するをいひ、正思惟とは、同じく四諦の道理を正しく考へ、正語は妄語・飾り多き綺語惡口・二枚舌等の罪過なく、正しく語るべきをいひ、正業は、殺生を爲す

如き無慈悲なる行爲なく、盜まず、邪婬を行はず、あらゆる惡き行爲を爲さずして、常に正しき行爲あるべきをいひ、五は、正しき名譽を得んが爲めに、其の職分に外れたる行を爲すことなく、自己職分を正しく盡すべきをいひ、六は安動せず、常に正しき目的に向つて勤勉力行すること、七は常に邪念なく、正しき念を懷くをいひ八は坐禪修養して、妄念を去つて眞の智慧を開發するといふ。斯樣に八の正しき道を以てすれば、遂に理想の涅槃に至るといふ。以上、三法印・四諦・八正道の說は、實に吾佛敎の根本思想で、其の意味の取り方に淺深高下の別があつて、大乘といひ小乘といふも、同じく是れ釋尊の說法であつ

て一切の佛敎は此の土臺の上に築かれ、大乘にもせよ、小乘にもせよ、佛敎信徒が此の敎に外れては實地の修行は出來ないのである。

他力念佛の信徒が、自身は是れ罪惡生死の凡夫と知ることの出來たのは、如來の慈悲によつて世間の無常を知り、我身の恃むべからざるを知ることが出來たからである。彌陀の大悲に取縋つた時、卽ちこれ無我の境界である、無我の境界には惑もなく業もなく苦もなく、卽ちこれを往生といひ又涅槃とも名付けられる。自力行者が一切の妄想を拂ひ去る、其の妄想は無常の相、我欲の體を具へたものであるからである。一切の妄想を拂ひ去つて此の身此のまゝ佛となつ

た時、拂ふべき妄想もなく、棄つべき我體も無い、この境界を悟界といふ悟界は卽ち無我の境界である。無我の境界卽ち涅槃である。而して此の他力の信を獲た以上、わが身も心も佛の光明の裡にあれば、爲す所の行も念も悉く八正道に契ふであらうし、悟を開いた者の身口意の三業も亦是れ悟の三業であるから自ら八正道に合することゝなる。

八正道の所詮

一代の佛教を大きく分てば、經・律・論の三藏となり、其の經・律・論の三つが詮す所の義理は、戒・定・慧の三學であることは、どなたもよく御存

じの事であらう。さて戒とは、これ〳〵の事を爲よ。これ〳〵の事は爲るなといふ、爲せ、爲す勿れといふ二つの命令規則で、定とは禪定で、坐禪觀法ばかりでなく、一心不亂の題目も、一念歸命の念佛も籠めた意味の禪定である、慧とは、此の禪定によつて得たる眞智をいふ、廣く佛教の上からいへば、涅槃に達するには、此の戒・定・慧の三學を修せよといふので、今此の八正道を約めて戒定慧の一學とすることが出來る。これが圖示すれば左の如くなる。(三學の學は、學問の學でなく、修行の意味である)。

一、正見
二、正思惟 } 慧

三、正語
四、正業
五、正命　戒
六、正精進
七、正念
八、正定　定

さて此の八正道を約むれば戒定慧の三學となるが、此の三學を更に外の語で言ひ現はしたものが七佛通解の偈である。阿難尊者は增一阿含經の首に於て、一切の佛法が此の四句の偈の中に籠る意味を說かれた。これをまた三學と對照すれば

諸惡莫作。諸衆善奉行――戒

自淨其意――定

是諸佛教――慧

こゝに善を行へ惡を作すなといふのは普通世間でいふ道德上の善惡を含むことは勿論、更に深い廣い意味の宗教上の善惡で或は意味に於ては、其の善は善惡を超絕した善である。さて斯樣に分てば四句の偈となり配すれば三學となるが、更に之れを約めて一とする事が出來るか何うか。實の所、大乘佛教、殊に現在お互が尊信する大乘教では實地修行の上には殊更に三學の名を設けず、各修する所の一法を以て一切の佛法を具足するとして居る。

即ち華嚴大乘家の六相圓融とか、天台の一心三觀とか、密敎の阿字觀とかは旦く措くも、手近い所では坐禪見性は絶對の善で、此の絶對善を得れば諸惡は自ら息んで其の心は淨くなる、是が世々の御佛が行はれた道で佛敎の骨髓である、又念佛は衆善の棟梁で絶對の善で同じく三學は具はつて居る、妙法蓮華經の題目亦然りである。斯樣に述べ去り述べ來れば三法印といひ四諦といひ八正道といふも悉く諸君が現在の宗旨々々の一法に在るので、謂はゝ無用の事であるやうなものゝ、其の絶對の一法に達するまでには、知らず識らずのうちに、又いろ〳〵變つた形式で此の八正道等の修行は行はれて

居るといふことを忘れてはならぬのである。

第十四章　忠僕中吉の話（商工子弟懇話會席上）

今日は商工子弟諸君の御集りになつたに就て、何か一席のお話をせよとの事で、こゝに出ましたのでありますが、先刻から引續いて有益なお話もあつて、諸君も餘程お聞疲れのやうでもあるし、且つだいぶ時間も經つた事でもありますから、今日は短い昔話を一つして御免蒙ることゝいたしませう。

江戸に、諸崎某といふ米問屋がありました、商賣も手廣くしまして財産も澤山あつて何不足なく暮して居る。ある年、伊勢參宮のかへるさ、東海道は古跡に名高い遠州小夜の中山のほとりに休みまして、ところの名物、飴の餅を食つて居るといふと、土地の子供が澤山集つて來て、羨ましさうに見て居るから、食ひ殘した餅を其子供等に分けてやると、子供等は喜んで、甘しさうに食つてゐる。所が其中に十歳ばかりの子供が只一人、子供等に交らないで、向ふの床几に腰を掛て居るから、諸崎の主人が傍へ往つて、お前も一ツお上りと餅を一つ出すと、其兒は「人の餘した物なんか、私は入らないよ」と頭を振つて取らない。見れば破れた垢の付いた着物を着て、小さい小供を負つてゐるが、その物言振から、仕こなしが、如何にも賢さうなので、諸崎の

主人が大層感心して、餅店のあるじに、あの兒はいづこの家の者かと問ふと、向ふの山影の農夫の子でございまするが、このほどの不作で日暮も出來兼まするので、私の家に養つて居りまする。あの子は親の性質を受け繼ぎまして、まことに正直な性質で、曲つた事は一寸でもしないといふまことに感心な奴でございまする。口不調法で言葉數は至つて寡い方でございまするが、入用の事は立派に申します。人樣の善い事は申しまするが、惡口は言はぬといふ可愛いものでありますので、私が子守をさせて育てゝ居りますと聞いて諸崎は猶更心を動かして、斯ういふ子供を店で敎育してみたら定めて立

派なものになるであらうと、頻りに欲しがる。餅店のあるじはこれを聞いて、それはまことにあの兒に取つて仕合せな事でございませう。どれ私が一走りまゐつて呼んで來ませうと、あるじは向ふへ驅けて往つたが、少時あつて、母親と兄とが來て、何うか宜しくお願ひいたしますといふことで、こゝに主從の契約が出來上つて、諸崎はその子供を家へ連れて歸つた。

さて、小夜の中山で得た者だといふので、名を中吉と改めまして、召し使ひまするといふと、何さま天性怜悧な上に、正直な事此上なく、影日向なく勤めあげて、十年の月日を一日のやうに送つた。そのうち

に諸崎の家は追々と繁昌して、お金も段々殖える。斯うなつて來るといふと、人間といふものは妙なもので、財集まれば奢るならひ、おのづから心に弛みが出來てまゐりまして、家の商買は番頭手代に任して置いて、自分は妾を拵へて、今日も明日もと妾宅通をする。茶や花に凝り出す、書畫骨董の類にお金を惜まず入れるといふ風になつて來た。すると、店の方では番頭手代は勝手な事をして店の賣上を掠めて代る〳〵惡所通を始める。しばらくの間に店は悉皆荒れて了つて、得意は減へる、お金は無くなる、借財は殖える一方となつた。この中に居て、只一人主家の事、主人の身上を案じて、裏に表に、肝膽を碎い

て居るのは中吉一人、何うかして主人の身持を改めて、元の諸崎にしたいと、面と向つて度々する强意見も、最早腸の腐つて了つた主人の耳には何の手ごたへもあらばこそ、却つてそれをうるさく思ふて、とう〳〵、暇を出されてしまつた。忠言耳にさからふならひ、十年の忠義も水の泡、中吉は詮方なく、あるじの許を退りまして、日比懇にしてゐた方を頼んで、しばしが程身を寄せて、あるじ一家の樣子を見てゐたのでありました。

所が諸崎の方では家運日々に衰へて、さしも名に負ふ豪富の家もつひに家資分散の悲境に陷りまして、市外れの片田舍に隱れて、わづ

かの家財道具の類を賣拂ふて露命を繋ぎつゝも、三とせばかりを送つて居るうち、つひに病に罹つて起き臥も自由ならぬ憐れな身上となつて了つた。今は誰一人として訪ふ者もなく、わづかに近所の人の情にて其日を送るといふ有樣。

さて中吉は、かねて習ひ覺えた按摩の業をいたしまして、主人の樣子を窺つて居ると、斯ういふ有樣なので、急いで主人の許に騙付けて晝は野菜を商ふて飲食の資となし、夜は按摩を業として主人の藥をとゝのへ、その間に纔なお金を蓄へて、まごころ籠めて介抱いたしましたので、諸崎もおひ〳〵快方に向ひまして、元の身體となつた。

或日中吉は主人の前に兩手をつかへて、さて改まつて言ふやうには、長々の御病氣も幸に全快いたしまして何より結構なことでございます。つきましては、このまゝ斯うして居りましては、浮かぶ瀨もございませねば、私はこれから大阪の方へまゐりまして何か適當な仕事を見付けまして、一儲して來ようと思ひます。大阪は名にし負ふ商業繁榮の地でございますれば、定めて面白い金儲もあらうと思ひまする。どうかしばらくのお暇を頂戴いたしたいと思ひまする。つきましてはこゝにお金が五兩ございまする。これは私が御奉公いたして居りまして以來、少しばかりづゝ蓄へたお金でご

ざいまするが、これを貴君にお預けいたして置きまするから、これを資本として、何か小商賣でもして私の歸つて來るまで御待ち下されたい。と肌に着けた胴卷の中から小判を五兩取出しまして、主人の前に差出した。あるじは中吉の忠義に感涙といめがたく何分よろしく賴むと兩手を合して拜まんばかりである。

さて中吉は、旅の用意もあらばこそ、懷中には一文の旅費とてもないが、旅行に金は妨げである。習ひ覺えた按摩の業こそ、旅路の資本なれと、十年前に上つた東海道、それも將來の出世を望んで上つたが今も出世の希望に下る。五十三次の驛路を日數重ねて下りまして

やがて大阪に到着いたしました。

さて、着くと直按摩の笛を吹き鳴らしまして、日々堂島邊を徘徊いたして居りまするうちに、堂島で餘り大きくはないが、大島屋といふ米屋に可愛がられて、そこの主人に毎晩按摩をする。ちやうど晦日の晩であつた。店の張場で店の者が二三人寄つて、パチ〳〵と算盤球を彈いて算用をして居つたが、どうにも算用が合はぬと見えて、またしては仕直し、またしては仕直して居る、張場の横手で中吉に按摩をさせてゐた主人が、もどがしがつて、按摩を止めて算盤を取り上げてパチ〳〵と遣つたが、それも旨くはゆかない。それを前刻からち

つと見てゐた中吉が、旦那樣失禮でございますが、ちよつと算盤をお借し下されと算盤球をパチ〳〵彈いて見ると、さすがは長年諸崎のうちで仕込まれた腕でございますから、確かなもので、これで如何でございませうかと算盤を差出して見ると、一文の相違もなくキチンと合ふ。店の者をはじめ主人までが感心をして、さて〳〵按摩さんお前さんは算盤は達者なものではないか。見れば年も若いし、萬事が按摩稼業に不似合な樣子ぢやが、いつか一度聞いて見よう〳〵と思ふてゐたが、一體お前さんは何うした身分の人なのかと、聞かれて中吉は元より隱すべきことでもないので、身上ばなしをするといふ

と、あるじをはじめ、店の者までが、中吉の忠義に感じ入つて、涙をこぼして褒め上げた。そういふ身上ならば、按摩稼業など止しにして、今日から內にゐて、商賣を手傳ふて下さらぬか、幸店にもう一人欲しいと思ふてゐる折柄であるからとの事に、中吉は渡りに船と喜んで早速そこに奉公いたしました。

算盤は達者だし、字は旨く書く。人物は正直であつて、忠實だといふので、あるじ一家に重寶がられ、朋輩衆にも評判がよく、すぐ番頭に出世をしたが、中吉が番頭になつてから、商賣に熱心な結果、得意はメキ〳〵殖えまして、大島屋は二三年立たぬまに、大阪隨一とも呼ばれ

る大米問屋となつた。これといふのも中吉が力と、四年後に店の支配人となり、六年目には立派に店を別て貰ふた。

中吉は、日頃の念願成就して、天へも登る心地がしたが、それにつけても氣に掛るのは主人の身上、絶えて久しい間どうして暮して居られるかと、急いで迎を遣つて見ると、暮せば、月日は短かい者で、あるじは中吉からのたよりを今日か明日かと待ちながら、どうなり斯うなり日を送つてゐたが、迎を受けて早速大阪へ下つて見ると、この有樣に再生の思がして、餘生を氣樂に送つた。

中吉は、あるじの紋の角の中に、中の字を入れた標を店のしるしに

して、長く家富榮えたといふ。これは柳澤淇園といふ人の書いた「雲莽雜誌」に出て居る忠僕中吉の傳でございます。

これから立身出世をしようとなさる皆さん方には、まことによいお話でございませう。凡そ立身出世の資本としては第一に至誠の厚いといふ事、第二には能く物事を爲すに足る手腕を有すること、まごころだけあつて、腕がなければ出世は出來ませぬ。腕はあつてもまごころがなくば、人に用ひられませぬ。中吉の如きは、二つを持つた人でありました。

皆さん方も、これから立身出世をなさるお方でございますから、品

性を修養し、商人として必要な智識を養はねばなりませぬ。

第十五章　地獄めぐり（滑稽教訓寓話）

はしがき

これからお話しようといふ「地獄めぐり」といふ滑稽ばなしは作平といふ一人の乞食が、ふとした惡心から、夢に地獄を廻るといふ筋でございます。お說教の餘興に、小僧さんにお話をさせて面白おかしいうちに教訓を得やうといふ筋でございます。

【一】

こゝに作平といふ一人の乞食があります。もとより乞食のこと

ですから身體の滿足に包まれぬ襤褸を着け、毎日方々の家の門に立ちて御飯の餘殘を貰つて飢餓を凌ぎ、夜になれば橋の下や木の下で破莚を被つて冷やかな夢を結ぶといふ風で味氣なう日を送つて居りました。

ある夏の最中、炎天ちやうど煖くやうな日に、あひ變らずお貰ひに廻りましたが、今日は何故か充分御飯も頂戴することが出來ず、ひもじい腹を抱へてトボリ〳〵と我が家である土橋の方へ歸途、ある大きな橋の上を通りかゝりますと、折しも日暮近うなつたものでありますから、一日中人を熱し苦しめた太陽も西の山に入つて了ひ、川風

涼しく橋の上を吹いて汗と塵とに塗れた作平の身體を洗ふやう、實に好い心持でありますから、橋の欄干に頰杖突いて川の邊を見渡しました。すると兩岸に在る立派な青樓が燦爛と電燈を點し、三絃を彈たり、鼓を打つたり、歌つたり舞ふて面白く騷いで居り、川の中では澤山の涼船を浮べて同じやうに騷ぎ、中にはお酒を飲み御馳走を食べて居ります。

作平は此の光景を自己を忘れて見て居ましたが

『アー何うも愉快さうだなア、那して川の面に船を浮べたり、青樓の二階で美しい女に歌を唄はせたり舞はせたりして、御馳走を食べて

居る人は眞實に面白いだらう、愉快からう、それにこの作平は如何であるか、炎天の下を一日中歩き廻つて一人の腹を脹す物も貰へず、空腹のを耐へてこれから御定まりの土橋の下で、孤に包まれて眠られねばならぬ、あゝ何といふ情ない事であらう、同じ人間に生れながら、何の因果でこんな身の上であるか、噫、もう此の世が厭になつた』。

と、深い愚痴をこぼしてやがてわが橋の下へ歸りまして、さて例のやうに横になりましたが、その事が、想ひの種となつて寢付かれませぬ、如何かしてあゝいふ境界になつて見たいといふやうな心持になつて亂れ亂るゝいろ〳〵の想ひに沈んで居るのでした。

『イクラ羨ましがつても、此のまゝ斯うして居ては死ぬまで矢張乞食だ、儘よ、長い浮世に短い命だ、これから盗賊にでもなつて、そして榮華を極めやう』。

不圖こんな惡い氣が起つて、遂に今夜の夜半に何處の富家へ忍入らうと決心して其處に寢入りました。

【三】

夜半作平は目を覺ました。

世間は寂然と靜まつて唯犬の遠吠が時々聞ゆるのみです、作平はムツクリ起上つて宵に決心した盗賊を始めやうと豫て用意してね

た一本の刀物を懐中に入れ汚れた手拭で頬被りをして何處ともなく徘徊してゐましたが、やがてある立派な家へ這入りました。

『ウムこの家は餘程立派な家だぞ、隨分お金が澤山あるだらう巧く盗み出さねばならないぞ』。

何分初めていゝありますからブル〳〵慄へながら、二室程往くと、客室と見えて立派な座敷があつて、而も洋燈の光が煌々として居るところに、お客があつた跡らしく作平がまだ見たこともない佳味さうな御馳走がいろ〳〵あつて佳い御酒が入れてある銚子が數本並べてあります。

『オヽ、これは何といふ有難いことだらう、盗賊にこんなに御馳走を饗應ふとはこゝの御主人は隨分お慈悲な方らしい。一つ御馳走にならうか。オヤ〳〵御酒に燗までしてある』。

非常に喜んで一本の銚子を口に當て飲むとそれが腸の心までキユーツと泌み徹つて何とも言はれぬ佳い味がある。毎日マヅイ御飯に飢を凌いだ者が御酒を飲むのですら佳味に相違ない、それから手當り次第に御馳走を食べ酒を飲み、夢中になつて暫時の間に悉皆平げて了つた。

『グーツプ。あゝ好い心持だ。あゝ極樂々々。オツト斯うして居

られないんだぞこれから金の在處を探らねばならぬ。金の在處はいづくでござるか。アハヽ、』。

酔ふた勢に恐ろしさも忘れて、種々苦辛の結果金庫を見出しこれを開くと金貨銀貨が幾萬圓とも知れぬ位澤山ある、それを大きな袋にギッシリつめ込んで肩に引擔いで其家を出ました。

『あゝ好都合だつた。こんなに澤山な金が一夜に儲かるとは乃公は眞實に幸福者だ、乞食の作平もこれから立派な家を建てゝ、一寸外出するのも二頭立の黑塗馬車に乘り、美しい女に取卷かれ威張散らすんだ、待てよ、さうするとこの着物や、お椀は如何したものだらう捨

てるのも惜しいものだしと言つて馬車に乘つて居てこんなお椀など持つて居られないや、衣服は洋服だ、御飯は椀の要らぬ洋食とかに爲る、洋食の遣り方は知らぬがその時には誰かに敎へて貰ふさ』。

などゝ囈語のやうな事を言つて喜んでゐますと俄然に彼方に瓦斯燈の光がピカリとしたかと思ふと、一人の巡査が靴音高く飛んで來た。

さすがの作平も慌て驚いて、金包を擔いで逃げ出しますと、巡査の方でもいよ〳〵こいつ怪しい奴だと、トットと走つて來る。ところがお金を充分澤山に袋に入れて居るものですから、思ふやうに駈る

ことが出來ない。ちやうど前に惡い心を發した橋の上に來た時、お巡査さんの手は作平の帶際にかゝりました。

サア大變、今一際で捕はれやうとした時一所懸命、其の手を拂つて川の中へ飛込みました、而も欲の深い奴ですから、金包を擔いだまゝ飛込んだので、その重力の爲に深い所へ沈んで了つた。

少時の間は、水が口や鼻に這入つて苦しくつて堪らなかつたが、次第々々に氣が遠くなつて、覺えぬやうになつたのです。

【三】

川の中に沈んだ作平は、氣が遠くなつて居ましたが、やがてふと氣

が付くと、我身は何時の間にか河を出て、目新しい非常に光景の變つて居る所へ來て居るのであります。

『オヤ、これは何うも變な所へ來て居るぞ何時來たのか知ら』。

クル〳〵目を廻して眺めると、生えて居る草木は松や杉などは一本もなく、トゲ〳〵とした刺のある名の知れぬものばかりで、大地は鐵のやうだ。ソヨ〳〵と吹く風は腥く太陽の光はなくて朦朧として居る、何故か絶えず人の泣き叫ぶ聲がかすかに聞えます。

『乃公が金を盜み出して巡査に川の中へ追込まれたといふことまでは覺えて居るが、それから少しも覺えない、何時の間にこんな所へ

來たのだらう。……若しやあのまゝ死んで了つてゐるんぢや無からうか。さうだ〳〵いよ〳〵然うだ、而うして此處は地獄だな、乃公は惡い事をした報ひによつて、この地獄へ來たのであるか、あゝ乃公は地獄へ墮つたのか。ワハ……』。

と、大聲揚げて泣き出しましたが、さてツクヅク思ひ返して、イヤモウ斯うして地獄へ來れば、娑婆とは幾萬里も隔たつて居るから何うしても歸られる事が出來ぬ。仕方がないからこゝで暮さうと決心した。而してお金を調べると、幸ひ一厘も減らずに背に擔いでありますから、

『先づ此の金さへあれば大丈夫、地獄の里も金次第だ、普通の奴は僅六厘持つて冥道へ來るが、乃公は隨分澤山ある、娑婆では乞食で、地獄では富豪か、いざこれから地獄名所の見物と出掛るかね』。

氣樂な奴で、ノソノソと歩み出すと、地獄の亡者とみへて白い脚絆を穿いて三角の紙を額に着け、苧幹を杖に、蓮の葉を被り、澤山彼方から來ます。こいつは好い道連だと、

『モシ〳〵、私は作平といふ乞食——ドッコイ、此頃は金持ですが、あなた方はどちらへお出でになるのでございます』。

斯う尋ねると、

『あなたは新入の亡者かゝは地獄のかゝりである死出の山だよこれから先が三途の河で、それを渡ると先が閻魔の廳がある、私等は今から苦惱を受けに往くんだが、地獄は隨分苦しいから、なるだけ罪を輕くして貰ひなさい』。

親切に言つて其の一行は行き過ぎた、作平は孤獨トボ〳〵道を歩んで居ると、やがて名高い三途の河へ來ました。

其の水の流れは藍のやうな色で油のやうにゆるく、冷やかでなくグラ〳〵と煮え返つて居る熱湯です。やがて其處を渡らうとする、岸の大きな樹の下に、恐ろし氣な婆あさんが居て、

『これ新入の亡者。此處は三途の河だよ昔からお定まり通り、汝の着物を脱ぐんだよ、さあ、早くお出しなさい』。

見るさへ悚然とする老婆さんが、荒々しく作平の襤褸衣を剝奪らうとする、他人の物を貰つたり盜むだり爲た事はあるが他人に物を與つたり奪られたことのない作平は惜くつて堪らないが詮術が無い、すると老婆さんは作平の背にある金を見てにはかにニコ〳〵笑ひ出して、

『オヤ大層お金をお持だね。お前は豪氣だ。今までこゝへ來る奴は皆貧乏だが、何故斯う澤山お持なの。何と物は相談だがお前の衣

服を脱ぐ代りに金を悉皆お出しよ、そうすると衣服を剝ぐのは免してあげるから……』。

と言ひました、が命掛の金はなか〳〵渡しません。老婆さん非常に怒つて、其れを奪はうとするから、作平は突然河の中へ飛込みました。

何しろ沸立ち返つて居る熱湯のやうなのが首がつかるまで深いのですから堪りませぬ、骨を徹すばかりの苦しさを耐へて漸とのことで彼岸へ着くと、肉が爛れて歩くことが出來ない。

【四】

さうすると、彼方から總身に毛の生えた牙の鋭い角のある赤鬼と青鬼とが飛んで來まして作平を火の車へ打込みました。

火は炎々と燃えて作平の身をジミ〳〵と焼まして其の苦しさは何に例へやう物もなく、言葉に盡すことも出來ぬが、それでもお金を焼いてはならぬと高く捧げて居りました。

暫時すると車はガラリと止まつて中から引出されると、此處が閻魔の廳でした。

作平は、全身焼け爛れ、金包を大切氣に持つてトボリ〳〵と門の中へ這入ると、其處に一疋の牛よりも大きな銅で拵へたやうな犬が

居て、血腥い口を開いて作平目掛けて食つてかゝつた。作平は大変だと逃出さうとしたが、早足にあんぐりと嚙付かれて股の肉はグサリと割き取られ、血はダラ〳〵と流れ落る。

娑婆に居て人の軒に立つ時は、たび〳〵犬に嚙まれやうとしたが大抵慈悲深いお嬢さんや坊ちやんが犬を追つて下さるんだが、地獄の鬼は却つて手をうつて笑つて居て、犬は其の肉をさも甘味氣にムサ〳〵食べて居るのでございます。

やがて閻魔の前へ來ると正面には大王、左右には各大臣が威儀を正して坐つて居られる、淨玻璃の鏡は煌々と照つて、造つた罪悪が映るやうに爲てある閻魔大王は一冊の帳簿を調べて居られたが、作平を見下して、

『汝は娑婆に居つた時、何の位な罪を造つたか、悉皆申立てろ』。

まるで破鐘のやうな聲で訊ねられた。流石の作平もブル〳〵慄へて居たが、餘程強情な奴ですから白狀しませぬ、すると大王は淨玻璃の鏡の前へ連れて往つて、

『作平、これを見よ、イクラ罪を造らぬと言つたところで、この通り明かに鏡に映つてあるぞ』。

と言はれたので、目を注いでそれを見ると、成程其の鏡には小さい

時から阿父さんや阿母さんに不孝を爲たことから、嘘を言つたこと人を欺したこと、幾千萬とも知れぬ位にあつて、中に一番大きく前に盜賊したのが宛然活動寫眞のやうに悉皆映つて居ます。

橋の下で惡心を發してあちらこちらを徘徊する所、家に忍び入つて御馳走を食ひ、お金を盜んで、お巡査に追駈られるなど其まゝすこしも差違ません、作平は愧づかしいやら怖ろしいやら恐れ入つて低首て居ると、

『この通りの澤山の罪惡があるのだから無間地獄とて、永劫、苦惱の絶へぬところへ往かねばならぬ』。

と宣告されました。あゝ情ないことになつて了つた。三途河で熱湯に沈み、火の車で身を燒き、犬に肉を割かれ、其の上まだそんな恐ろしい所へ遣られて堪るものか、乃公のやうな惡い業を持つて居るものは如何樣な苦惱を受けねばならぬか底が知れぬ、何うかして巧く逃げ出さねば。と作平は決心して、さて鬼共の隙を窺つて逃げ出しました。

【五】

ソラ罪人が逃げた、捕へよと二三の鬼共が追駈て來るのを、あひかはらず金包を背にして凡そ一里許りも逃げ伸びると、幸ひ、鬼も追駈

て來ない樣です。先づ安心と路傍の石に腰を下したが非常に腹が空いて何か食べたくつて詮術がない、何か食物を賣つて居る家は無からうかと見廻したが、其處一面に廣い野原で、一軒の家もありません。

『あゝ御酒が飲みたい、御飯が食べたい』と獨語して居ると、遙か彼方に三絃の音が聞える。

『これは妙だぞ、三絃の音がする、何處でするのか若し青樓でもあれば何か驕らう』。

急いで駈付けて見まするとと、地獄名物の腥い風はなくて、其處は

若草萠ゆる春の野で、蓁、蒲公英などが咲き揃ひ、芳香が馥郁として居ます、而して其の中央に紫の幕を張つて中で御馳走を煮て居るらしく好いにほひがプン〳〵と鼻を衝きます。

『田舍に都ありとは此の事だ、誰かお花見をして居るらしい、乃公も折角命を捨てゝまで金を盜みながら、まだ一厘も使はないでは馬鹿らしいや、これから地獄で大盡遊びをしやうか』。

と、其の幕に近付と、中から美しい女が一人出て來て作平の手を採つて、

『貴君がお出でなさるのを待つて居たんでございますよ、さあ御馳

走も澤山出來て居ります、早く上つて下さいよ』。

莞爾笑つて居る其の可愛らしさ、生れてからまだこんな美しい女に一言も交して貰つたことのない作平は、天に昇るばかりに喜んだ

『へゝゝゝ有難うございます、それでは頂戴いたします』。

幕を開くと中には天女のやうに美しい女が澤山居て御馳走を山のやうに盛れたのを持つて來て御酒をすゝめ、いろ〳〵の妙なる音樂を奏でます、而して一人の女が立上つて舞ながらこんな歌をうたつて居ます。

肉の美、香の酒

翠の帳、紅の閨

飲めや歌へや花の宴

飲んで歌ふて勞れたら

胡蝶の花に宿るやう

其處に眠りを貪れよ

樂き夢を結ばせん。

其の聲の清しく美しいのに作平は恍惚となつて了ひすゝめらるゝ酒は甘露のやう、極樂に遊んで居るやうな心持になり、共に狂ひ騷いで居るうちに、たん〳〵酔勞れてそこに眠つてしまつた。

【六】

やがてふと目を覺ますと、前の美人は何處かへ行つて了い、わが身は草茫々たる野邊に石を枕に横たはつて居り、美しい花や香は無くてあひかわらず腥い風が吹いて居る。

『アーッ(欠伸)眞實に何うも御馳走さまであつた。面白かつた。これでこそ遙々娑婆から來た甲斐がある。この作平さんは實に評判が好いぞ、娑婆に居れば頼み頼むで御飯の殘餘を貰ふのが關の山だのに地獄は頼みもせずお金も出さぬに、御馳走を召上れとは何う嬉しいや。オヤ何だか光景が變つて居るぞ前の御方は何處へ行

かれたのか、オツト幕もなければ、お皿も銚子も花一ッ咲いて居ない全體これは何故だらう……。

作平は呆れ果てゝ、ふと氣が注とお金が無い。サア大變、命より大切ごころか、命を捨てゝまで盗んで來たお金が無くなつたのですから、魂を飛ばして驚いた。イクラ捜しても見當らない。

『嗚、殘念な事をした、偖はウマク乃公を欺して酒に醉はして眠らして置いて金を盗んで逃げたのだ。あゝなさけない事になつて了つた』。

ヒイ〳〵と泣きながら力なく立上つてたゝさべ亡者の力なく悄

然としてそこを立去りました。

作平は何の目的地もなくトボリ〳〵と歩んで居るうちに地獄にも夜があるか、日はトップリと暮果てゝ四面は眞の暗黑となり、何方へ行つて好いやら途方に昏れて茫然佇んで居ると遙彼方に高い山のやうなものがあつて、其頂にチラ〳〵火光が見えて居る。

『ヤレ有りがたい、彼處に火が見ゆるぞ、誰かゝ住んで居るんだらう』。

急いで其處に驅付けると、これは險しい山であつて其の上は眞晝のやうに光が輝いて居る、喜び勇んで其山の半腹まで來て上を眺めると、非常に立派な家が建てゝあつて、其の中にそれは〳〵美しいお

姫さまが莞爾々々笑ひながら作平を手招きせられます。

前の失錯を打忘れて、作平は喜び勇んでヅン〳〵馳登つて既早一足で其の頂に達さうとした時、俄然足の裏がチク〳〵痛くなつたオヤツと思つて下を見ればこれは如何でせう、其處一面に鋭い劍が生へて作平の足の裏より刺通します。其の痛さと言つたら實に堪らない、呀ッと叫んで倒れると、そこの劍は身體を刺す、起き上れば足を刺す、七轉八倒の苦しみをしつゝ上を仰げば美しいお姫さまが、あひ變らずニコ〳〵笑ひながら、其の嫋々とした手でもつて作平を抱上げんとせられるので、

『あゝ有難いあれが私を救つて下さる御方だ』。

と、そこへ這上らうとするけれ共一寸も進まぬ、漸との事に其處に近付てお姫さまの手に觸れてヤレ嬉しやと思ふ間もなく、お姫さまは見る〳〵恐ろしい鬼となつて、劍のやうな其の手で作平を掴み後の方へ投付ました。

投付られた作平の身體は宛然小石でも投つたやうヒユーと風を切つて深い〳〵谷間へ落込んで行きつゝ下を見れば、遙谷底には、紅の炎が熾に立昇つて其の中には黑焦になつた人間が澤山其の中を昇つたり降つたりして居ます。あれが世に云ふ焦熱地獄か、おれは

あの中へ落込むんだな、情ないことだと思つて居るうちに早炎の中へズーッと落込む。炎は其の大きな舌で作平を包むかと思ふ間もなく黑焦になつて了ひました。この世であつたならば忽ち灰になるのですが、既に亡者である身は灰にもならず、また此上死ぬこともなく、燒き上げ燒き下げられて苦惱で居る。

【七】

すると一人の亡者は作平を見るより、

『オヽ君は新入かね。可哀相に劍の山から陷落つたんだらう、隨分苦しいから辛抱爲給へ』。

さすが地獄に落るやうな悪い奴ばかりですが、わが身も苦しいので同情の心を起して親切である。

『パイ新入の作平といふ乞食ですから、以後よろしく御願致します仰の通り劍の山からです。イヤモウ苦しいことでございますね、こんなに甚い苦惱をする位なら寧そ死んで了ひ度うございます』。

『大きに然うだ。だがこれが此の國の常だからね。寧そ死んで了ひたいと言つたところでこゝで死んぢや娑婆へでも生れるかチアハヽヽ。時に君は全體娑婆で如何いう惡業を爲たのだい』。

斯う尋ねられて作平はこれまでのことを悉皆語りました。

『然うか私等も同然だ。君がお姫樣だと思つた鬼は、あんなに美しく化て居て、亡者を迷はせ、こゝへ落した者が幾人あつたか知れぬ位だ。しかし作平さん、お互に生きて居た時は惡い事ばかり爲て惡事には惡い報ひが來るといふことを信とせなかつたが、こゝへ來て漸くそれが解つたよ、噫、こんな事であつたならば、假令、塵程の善事でも行ふであつたと、常に後悔して居るよ。

さも悲し氣に言ひました。作平もこれを聞きつゝ成程其の通りだと感じ入つて居ると、折柄一陣の强い風がサーッと吹いて、作平の身體を包んで遙彼方へ吹飛ばした。

また何處か恐ろしい所へ行くのであるかと心を痛めて居ると、やがて強く地響して落つたところは、廣々と展がれた田の上で其の近邊には多くの亡者が田を耕して居りました。

【八】

處がそれは此の世とは反對に人が牛に追立てられて土を堀返して居るので、而も其牛は象のやうに人がすこしでも力を鈍らすと、大きな、鋭い角で遠慮なく突立てるので、其の痛さ苦しさが察せられるのでございます。

『あゝ何うも種々なことに遇つたり、見たりするものだ。これは何

うした因果であるか。

暫らく立つて見て居ると、其處へ一人の亡者が牛に追はれて通りかゝつたから、それを尋ねると、

『よくお尋ね下さつた、眞實に苦しくつて堪りません。これは娑婆に居た時、牛や馬を苛く使役つた報ひでして、世にゐた時に動物を虐く使役うな、可愛がれと、お寺の和尚さんや、教育家に聞かして貰つたのでございますが、ナニ牛や馬は人に使役れに世に生れたものだ、働かせるだけ働かすのだなどゝ言つて居ましたが、今ぞ始めて知りました、永劫、此處に居るうちに再び娑婆に歸ることが出來たならば、牛

や馬のみならず、犬や猫まで出來る限り可愛がつて遣ります。若しも貴方が世にお生れになれば貴方はお慈悲深うございませうが、お子さん方にもよく言聞かしてお上げなさいませ。今からまた永く休暇なしに田を耕さねばなりませぬ。左樣なら……。

又も牛に突立てられて行つて了つた。

『成程、牛や馬などを可愛がつて遣らねばならぬ、乃公は幸に猫一疋飼つた事なく、隨つてそれを苦しめた事が無いから此の苦患は免れることが出來たありがたいことだ、この事をよく覺えて居つて、後に娑婆へ出た時にこの意得を持たねばならぬ。

などゝ心中に思ひつゝ歩みを運んで居りました、然うすると其の前面に高い山がありました、それを越さねば向ふへ行けない。作平は疲れ果てた足をもつて、漸く其の頂に近くなつた時、頂上には人が澤山集つて居て、何か騒がしう言つて居ります。何事であらうと窃と忍んで行つて、傍の岩蔭に隱れて視偷て居ると、二人の老年た男女を澤山の男女が取圍んで交代がはるに何か悲し氣な聲で罵つて、太い鐵の棒で其の二人を撲つて居るのです。

【九】

『自己が初めて家を起した時は、澤山の財產が出來て居て幾十代續

いても此の財産が無くなるといふことは無からうと喜んで居たのであつた、それに汝のやうな怠惰者があるばかりに、折角の家は破産して了ひ、乞食までに零落るとは、何といふ情ない奴だ、加之、私等先祖の法事追善などはすこしもせず、われら代々の者は子孫に財産を殘さんが爲めにいろ〳〵惡い事を爲た報ひに因つて皆殘らず地獄へ落て苦しい、憂目を見ることだ、あゝ悲しや、恨めしや。

と、中で最も老年の亡者がビシリ〳〵と前の鐵棒で撲つと、續いてやゝ若さうなのが出て來て、

『吾家の先祖が今汝に言はれた通り、何故汝はあんなツマラぬ者になつたのだい、私が死んだ後で財産を殘らず惡い事に費やして、お線香一本も先祖は愚、兩親の私等夫婦にさへ供へた事も無い、家の祖先も祭らずして、人としての義務が果せると思ふか、忽ち乞食になつて了つて夫婦のみならず、私の孫の作平までも同じ乞食となつて苦しみ、而して汝は知るか知らぬか、其の作平は、惡事を爲して近頃こゝに落ち、種々の苦惱を受けて居るのである、あゝこの憎い我子よ。

同じく鐵棒で撲續けて、二人のみを殘して澤山の亡者は何處かへ去つて、二人は其處に泣き倒れてゐます。

前刻からこの恐ろしい光景に、戰慄て居た作平は、前の亡者が作平

といふ名を呼び、またそのいふ事がわが身の上に似て居るのに氣が注て熟々泣き倒れて居る二人を見ると、これは如何でせう紛ふ方ないわが幼い時に死別れた阿父さんと阿母さんなのでございます。

『オヽ懐しい御兩親樣、何故地獄に墮ちて苦患を受けなされるのかお可哀相に……。

急に岩蔭より飛び出て、二人の袖に縋り付くと、こちらも非常に驚いた風でしたが、互に又と無い不思議な會合に、其の境遇を忘れて、嬉し涙に咽びました。

【一〇】

やがて作平はこれまでのことを悉皆話ますと、父は聞き終つて云ふやう、

『親子の緣が盡きず、斯く打寄つて喜ぶものゝ、私等親子は哀れに罪深き者である、今お前が見て居た通り、彼の澤山な人々は皆わが家の祖先であつて私が祖先への不孝を憎むで毎日々々私等二人を責められるのだ、祖先があゝして怒られるのも道理、抑私が家は古くから財産もあり、家柄も至つて好いのであつたが、私が相續してから日夜、惡い事にのみ耽つて、遂に財産を悉皆無くして了ひ、汝が產れる以前乞食となり、果てたのである、そんな風であるから家のお墓へ參詣

したことは一度もなく、佛事を營むことなど知らなかつた。その報ひによつて夫婦共こゝで苦患を受くるのである、汝が他人の榮華を羨んで盜賊をするやうになつたのも、皆私の罪である。若しも汝が私より早く世に出ることが出來たならば、何卒私に代つて祖先へお詫をしてお呉れ。あゝ人と生れて祖先の御恩を忘れるやうな不心得者は皆私のやうになるのだ、オヽこれから又他の苦惱を受けねばならぬ、名殘は盡きぬがこれで別れるぞ』。

と、言畢つて阿母さんと共に烟の散るやうに姿は失せた。

『何故そんなに早くお別れでございますか、今しばらく御顔を拜みたうございます』。

イクラ呼んでも答へはなく、遙に聽こゆるものは亡者の苦に悶ゆる叫びのみであります。

* * * * * * * * * * * *

【一二】

『オヤ！〳〵今のは皆夢であつたか、あゝ眞實に長い夢恐ろしい夢を見たものだ、長いのも道理、既早正午時だ、何故あんな恐ろしい夢を見たのだらう、昨夜何處かへ盜賊に這入らうと思つて寢たまゝで、あゝ

思ひ出しても氣が狂ふやうな苦しい地獄へ墮ちた夢を見た。身體一面に油のやうな汗が出て居る……』。

乞食の作平は橋の下で起き上つた。彼は昨夜歸つて眠つたまゝ盜賊を爲たり、地獄へ墮つていろ〳〵の苦患を受けた夢を見たのでありました。

『しかし此の夢は普通の夢では無い、若しも私が眞實に盜賊をして澤山の金を盜んで居たならば、地獄に墮つるまでもなく此の世に居ても同じやうな苦惱を受けるのであらう。折角大切な金を酒に醉ふて眠つて居る間に盜まれたやうに、假令、幾萬の金を持つて居やう

が、酒や女に心を奪はれたならば忽ち無くなつて了ふ、劍の山で苦しむだのも、ツマリお姫さまに迷つたからだ、世間の人が色だ戀だと騷ぐのは炎の谷や、劍の山があるのを知らぬからで、一つ間違へばそれに落込むのだ、こんな夢を見るのも自己が金が欲しい、榮華を爲たいと思ふからであるが、正しからぬ金や榮華は身を苦しめる原因だ、矢張り無い程氣樂な者はない、さらばこれから御飯のお殘りでも貰つて來やうか、しかし夢の終にあつた兩親や先祖の事は、成程あの通かも知れない。然うするとこれから、一つ心を入れ更へて、絶へた我が家を再び興さねばならぬ。

斯樣に深く考へたのでありました。

それから後作平は宛然生れかはつたやうになり、善い事ばかり致しまして能く働いたものですから、遂に乞食の仲間を出ることが出來て、立派な家を建て祖先の佛事は無論よくつとめ、いよ〳〵立身したといふことであります。（をしまひ）

（作平申す）なが〳〵御退屈でございました。私はこのおはなしのやうに金を盗んで巡査に河の中へ追込まれ、死んで三途河の婆あさんに其の盗んだ金を奪られやうとして熱湯の流るゝ三途河に飛込み火の車に乘せられて閻魔の廳へ往き、淨玻璃の鏡に造つた罪を

寫出される等のことから、劍の山でお姫さんに迷ひ、焦熱地獄に落て苦しみ此の世で動物を虐待した者が牛に追はれて田を耕し、祖先のお祭をせなかつた私の父が祖先に責められて居る等いろいろの恐ろしいことを地獄に見たことを夢みました。その苦しさ恐ろしさ今思ひ出しても悚然とする位でございます、抑も私がこんな夢を見るのも、實は其の夢を見た夜、まことに惡い念を起したからで、偖覺めて後、惡い事をすればこんな夢の地獄よりも一層劇い處へ落ちるだらうと懺悔して出來る限り善いことをして居ります。

何卒諸君がた、このおはなしの私のやうに惡い念を起さず、また

地獄に落つて苦しんで居る者をもつて深くわが身を省て下さい。

對機說法 終

不許複製

對機說法

大正四年六月一日印刷
大正四年六月五日發行
【定價金四拾五錢】

著作者 稲村修道
京都市下京區中珠數屋町烏丸東入廿人講町廿二番戶

發行兼印刷者 西村七兵衛

發行所 京都市東六條 電話下四五八 大阪口座一七〇四 法藏館

新布教叢書

第一編▼布教百笑話　第二版　定價四拾五錢

第二編▼釋尊御一代說教　新刊　定價四拾五錢

第三編▼應病與藥　新刊　定價四拾五錢

第四編▼對機說法　新刊　定價四拾五錢

第五編▼珍談百集　新刊　定價四拾五錢

第六編▼義士傳說教　新刊　定價四拾五錢

發行所　京都市東六條　電話下四五八　大阪口座一七〇四　法藏館

325
357

終